

4章

【問題】(演習)

出典：田島正樹『魂の美と幸い』／オリジナル問題

文章略解

戦後の教育界では権威は忌避されるべきもののように考えられてきたが、権威を否定する風潮は一種の戦後の歪みであり、あたかもそれがないかのように振る舞い、裏取引を通して物事を決定する風土が作り上げられてしまった。しかし、教育は未熟な人格を自律的主体へと陶冶する営為であり、教育における権威は必要不可欠である。また、教育においては、教育される側の知的欲求を惹起せねばならず、そのためには権威の見せかけともいべき人格的要素が必要となる。その意味でも教育に権威が必要であるのは自明なことである。

解答

- (一) 自らが権威を否定した以上、他人を主導すべきときにも権威を示すわけにいかず、指導力を発揮できなくなったということ。
- (二) 教師の権威を感知した生徒は暗黙のうちに教師の統一的意思に追従し、その意思が貫徹する構造ができあがったということ。
- (三) 教育の機能は知的な優劣関係を前提としており、対等な関係を前提とする商取引と同列に論ずることはできないということ。
- (四) 教育の目的は生徒を知的主体へと陶冶することだが、生徒自身は知の内実を理解しておらず、それへの志向を有してもいないから。

(五) 教育とは上下関係を前提に未熟な人格を自律的主体へと導き、生徒の知的関心を惹起する営為であり、その遂行には知的でかつ人格的な権威が不可欠だが、反権威主義者は教育のこの根本的な構造を無視し、教育の場で実際に利用している権威の存在を隠蔽するから。〔120字〕

(六) a 〓 漸進

b 〓 団塊

c 〓 奨励

d 〓 陶冶

e 〓 操作

書き下し文

元皇帝既に陣そに登るや、鄭后の寵を以て、明帝を捨てて簡文を立てんと欲す。時に議者咸謂みなおもへらく、「長を捨てて少を立つるは、既に理に於て非倫なり。且つ明帝は聡亮英断を以て、益儲副たるに宜よろし」と。周・王の諸公も、並びに苦はなだ争ふこと懇切なり。惟だ刁玄亮は独り少主を奉じて、以て帝の旨に阿おもらんと欲す。元帝は便ち施行せんと欲すれども、諸公の詔みことりを奉ぜざるを慮おもる。是に於て先づ周侯・丞相を喚よんで入らしめ、然る後に詔を出だして刁に付せんと欲す。周・王既に入り、始めて階頭に至るや、帝は逆あらめ詔を伝へしめ、遏とどめて東廂に就かしむ。周公は未だ悟らず、即ち卻略きやくりやくして階を下る。丞相は詔を伝ふるを披撥し、徑ちに御牀ぎしやうの前に至つて曰く、「陛下の何を以て臣を見るかを審つまひかにせず」と。帝 黙然として言無し。乃ち懐中の黄紙の詔を探り、裂いて之を擲なつ。此に由つて皇儲こうちよ始めて定まる。周公方に慨然として愧歎きたんして曰く、「我常に自ら言ふ、『茂弘に勝る』と。今始めて如かざるを知れり」と。

現代語訳

(東晉の) 元帝は即位したあとで、鄭皇后を寵愛していたために、(長子である、後の) 明帝をさしおいて(末子ではあるが鄭皇后の産んだ、後の) 簡文帝を(皇太子に) 立てたいと思った。当時、評者はいずれも次のように考えた。「長男をすておいて末子を(太子に) 立てるのは、それだけでも道理から言つて人倫に背いている。そのうえ、明帝は聡明かつ果断であつて、ますます世継ぎの君としてふさわしい」と。周顛・王導の(二人の) 諸公も揃つて口を極めて真剣に(元帝を) 諫めた。ただひとり刁玄亮だけは年少の皇子を皇太子と仰ぐ立場をとつて、そのことで皇帝の意向に沿つてご機嫌を取り結ぼうとしていた。

元帝はすぐにもことを運ばせたいと思つたが、周顛・王導の諸公が(後の簡文帝を皇太子に立てるといふ) 天子の言葉に従わないことを心配した。そこでまず周侯と王丞相とを召し出して(殿中に) 入らせ、(簡文帝立太子の詔勅を発する朝堂から離れたところに二人をいさせるように仕向けたうえで) そのあとで詔を出して刁玄亮に渡そうと考えた。周・王(の二人) が参内した後、やっと(玉座

の前に昇る) 階段の近くに來ると、元帝は前もって(謁見の取り次ぎの係りの役人に対して周と王の二人を朝堂に入れてはならない旨を側近に) 指示させておいて、(二公が朝堂に昇ることを) とどめて東側の廂の間に行くようにさせた。周公は(事の子細が) よくわからず、(取り次ぎの役人の言葉を聞くと) 直ちに後戻りして階段を降りた。王丞相は(朝堂に入らぬようにという元帝の) 言葉を(取り次ぎの役人が) 伝えようとするのを振り払って、すぐさままっすぐ玉座の前に進んで言うには、「帝が何のために私めを召見なさるのか、いぶかしいものでございます」と。元帝は(王丞相の直言に) むつつりと黙り込んで一言も発しなかった。そしてしばらくの後、懷中にかけていた(帝の色である) 黄色い紙に書いた(正式な) 詔を探って取り出し、破いてそれを投げすてた。このような経緯で(明帝を) 皇太子(とすること) がやっとな決まった。

周公はそのとき、(王丞相の言動を聞いて) 悲しみ嘆いて恥じ、溜め息をつきながら次のように語った。「私はこれまでいつでも自身で『王茂弘(丞相) よりも(私のほうが) 優れている』と口にし(またそのように自負し) てきた。しかし今になってはじめて(自分が王丞相に) かなわないことがわかったよ」と。

解答

- (一) 明帝は簡文帝よりも年長かつ聡明果断なので、明帝を皇太子とするよう二人揃って衷心から元帝を諫めたということ。
- (二) ただ刁玄亮だけは年若い王子を支持して元帝の気持ちに迎合しようとした
- (三) 元帝は事前に周と王の二人を玉座の前に来させるなど側近に命じて取次役に指示させて
- (四) 王導は元帝の企みを見抜いて直言によって義を通したのに、自分はいかつかつにも言われるままに退出してしまったのを恥じたから。

出典：鷺田清一『じぶん・この不思議な存在』／ オリジナル問題

文章略解

人生というのを、まっすぐな連続した線のようなものだと考える悪癖からはそろそろ脱した方がいい。過去の自分の延長線上に現在や将来の自分を構想することは、かえって自分を過去の実績に縛り、そこから外れた生き方を否定するという点でアイデンティティを不自由にするからだ。それよりはむしろ、それぞれの他者との関係性に応じて柔軟に可変する複数のアイデンティティを設定できる方が、自分のあり方としては豊かなのではないか。

解答

- (一) 勤勉さについての自己解釈は連続した線状の人生を前提とするので、度が過ぎると将来の方向を限定してしまうから。
- (二) 過去の記憶に囚われすぎると、情勢に応じて自己のあり方を多様に変化させていく可能性を狭めてしまうということ。
- (三) さまざまな他者を想定したうえで、それぞれと自分との関係を吟味することによって、多様な自己認識が深まっていくということ。

解説

- (一) 傍線部分に言う「自己解釈を加えないほうがいい」ということの原因については、直後の「たとえば……」以下の具体的な説明を追っていくことからつかめていく。ここで筆者(鷺田)が「満ちたりた将来のためにいまできるだけがんばっておこう」という論理(6行目)を例に述べていることは、とどのつまり「じぶんを過去の『実績』から逃げられなくする」(9行目)ことの弊害に根ざす。これは、続く部分に言う「いつも同じ線の上にい」(10行目)ることによるものである。

以上のことをまとめれば、「連続した線上の人生」に囚われることによって、過去の「実績」に規定された方向の人生しか歩めな

くなってしまう、という危険性が浮かび上がってこよう。この点を軸にして解答をまとめていけばよい。

(二) 傍線部分の直前にある「これ」とは、「満ちたりた老いらく」(19行目)という「変化すること、存在がめくれることをみずからに禁じるような生きかた」(24行目)を指す。このことが、いかなる意味で「貧しさ」につながるのか。その「貧しさ」の本質とは、「変化」の乏しいことになろう。

こうした事情をまとめる形で「すでに確定した過去の延長線上でなりたつ現在」(23行目)というあり方が、変化の可能性を狭めるという意味で「貧しさ」なのだ、という説明があればよい。

なお、この傍線部分に言う「もう一つの」というのは、(一)で見た「貧しさ」と対応している。そこで、(一)と(二)との設問をセットとして、(一)では現在から未来へ、(二)では過去から現在へ、という方向性の表現が対比的に読み取れるように考えていくと、答案をまとめやすいだろう。

(三) 傍線部分に言う「わたしたちの『だれ』」とは、直前の「じぶんはだれか」(40行目)という問いかけに答えるものである。平たく言い換えれば「自分は誰なのかという問いに対する答え」つまりは「自己のあり方についての認識」ということになろう。

この「だれ」が「他人との関係のなかで配給される」とはどういうことか。これについては、直前で「じぶんのなかで持続する同一性に求める習慣」(40行目)とあるところと対比される形で傍線部分が述べられていることに注意したい。要するに、自己のあり方というものは、じぶんの中でだけ考えたってわからない、ということだ。裏返せば、他者との関わりの中で初めてわかるものなのだ……と筆者(鷺田)は述べているのである。「配給される」という言葉のニュアンスに合わせて考えるなら、「それぞれの他者との関係の中で、それぞれにわかってくる」という趣旨の指摘がほしいところだ。

出典：伊藤仁斎『古学先生文集』巻之五所収「同志会筆記」の一節 / 東京大学 97年

書き下し文

之を罰して人をして悪に懲りしむるは、之を賞して人をして能く善に勸ましむるに若かず。之を威して人をして刑を畏れしむるは、之を恩して人をして能く徳に懐かしむるに若かず。之を惡みて人をして悪に遠ざからしむるは、之を愛して人をして能く心に感ぜしむるに若かず。孟子曰く、「中や不中を養ひ、才や不才を養ふ。故に人賢父兄有るを樂しむなり。如し中や不中を棄て、才や不才を棄つれば、則ち賢不肖の相去ること、其の間寸を以てする能はず」と。世に兄賢にして弟不肖、之を惡むこと過ぎて甚しく、反つて其の惡を激成する者有り。豈に孟子の所謂賢不肖の相去ること、寸を以てする能はざる者に非ずや。故に不肖の子弟を養ふは、善く処するを以て要と為す。善く処するは能く愛するを以て本と為す。

現代語訳

人を罰することによってその人を悪に懲りるようにしむけることは、人を褒めることによってその人を善に励み努めることができるようにしむけるのに及ばない。人を脅すことでその人に刑罰を恐れるようにさせるよりも、人に恩恵を与えることでその人を徳になれ親しむことができるようにさせるのがよい。人を憎んでその人に悪から遠ざかるようにさせるよりも、人を慈しんでその人に(善を)心に感ずることができるようになるのがよい。(何につけ、人を抑えて悪に進ませないのよりも、のびのびとさせてやって自分から善を求めるようにしむけてやるのがよいのである。『孟子』では次のようにいっている。「中庸の徳をもった人が中庸の徳のない人を教え導き、才能のある人が才能のない人を教え導く(のが道理というものである)。だから、人は(人徳や才能の備わった)すぐれた父兄を持っていることを楽しみとするのである。もし、徳のある人が徳のない人を見捨て、才能のある人が才能のない人を見捨ててしまうならば、(見捨てることによって賢者の人徳や才能は失われてしまったことになり)賢者と愚か者との隔たりは、その間隔が寸(というわずかな単位)で計ることもできない(ほど差のないことになるのだ)」と。世間には、兄は賢く弟は愚かで、(兄が)これ(「弟」)を過度に憎んでしまったために、かえってその(弟の)悪いところを増長させてしまうような者がいる。(これぞ)孟子の

いう「賢不肖の相去ること、寸を以てする能はざる」者でないことがあろうか（いやまさに、孟子のいうとおりの人間である）。だから、愚かな子弟を教え導くということ（において）は、（そのような子弟に）手厚く対処することが肝要だ。（そして）手厚く対処することは、（人を）慈しむことができるということをも根本とするのである。

解答

- (一) 人を罰してその人を悪に懲りさせるよりも、人を褒めてその人が善に励むことができるようにしむけるほうがよい
- (二) 賢者が愚者を見捨てると、賢者としての務めを怠ることで自身の賢明さを失ってしまい、愚者と同じだと考えている。
- (三) 愚かな子弟を教え導くには、手厚く対処することが肝要だ。手厚い対処とは、人を慈しむことができるのが根本である

解説

- (一) それほど難しい箇所はない。まずは、文の構造をしっかりと掴んでおこう。この文は、「A不若B」という形になっている。「不若（ニシカズ）」は、言うまでもなく、比較の基本的な句形（「不如」としても同じである）。それゆえ、全体では「AはBに及ばない・AよりBの方がよい」という意味になる。次に、そのAやBに相当する「罰之使人懲悪」「賞之使人能勧善」だが、ここでの注意点は「使」である。「使人V」の形で、基本通りの《使役》である。「人にVさせる」と訳すことは、これまた言うまでもないだろう。以上で基本的なところは押さえられた。後は細かな箇所の処理だが、この段階で少々戸惑った人もいたのではなからうか。具体的に言うと、「罰之」「賞之」の「之」を指示語と考えてその指示内容をあれこれ考えたりはしなかっただろうか。実は、この「之」は具体的な指示内容をもたない。単に調子を整えるために用いられたに過ぎないのである。それゆえ、之〳〵人と見ておけばよい。残るは「能」だが、これは「〜できる」という可能の意味を表す副詞。ここでは直後の「勸」を修飾しているので、「善に励むことができる」と訳す。このあたりをいい加減に処理しないこと。

- (二) 「筆者はどのようにしてそうなるかと考えているか」という問いであるから、基本的には傍線部にいたるまでの過程を答えておけば

よい。そして、直前に「如く」という条件句があるのだから、後はここを訳して……という方針は設間を読んだ段階ですぐに立つだろう。それはそれでよい。ただ、この設間が少々ややこしいのは、傍線部の意味を案外誤解しやすいという点である。それゆえ、まずは傍線部自体の解説をしておく。

問題があるのは「不能以寸」の箇所である。注も頼りにすると「(その間を) わずかな単位で計ることはできない」となることまではすぐにわかる(はずである)。問題はここからで、「賢と不肖の間をわずかな単位で計ることができない」とはいったい何を意味しているのか。考えられるのは、①わずかな単位でも計ることができないと考えて、「その差はほとんどない」とする理解、②わずかな単位では計れないと考えて、「その差は非常に大きい」とする理解の二つである。では、どちらが正しいのか。ここで設間に注意してほしい。東大は、決して『孟子』自体の理解を尋ねているのではないのである。「筆者は」とわざわざ断っている以上、東大が求めているのは筆者すなわち伊藤仁斎がどのようにここを考えているのかということである。そこで視点を文章全体に広げて、伊藤仁斎がこの句をどのように理解しているのかを考えていくことにする。

すると、引用部分に続けて、「世有兄賢而弟不肖、悪之過甚、反激成其悪者。豈非孟子所謂賢不肖之相去、不能以寸者耶」とあることに目が向くはずである。ここに注目すると、「兄(＝賢者)が弟(＝不肖)を過度に憎んだために弟の悪を増長させてしまう」ことが「不能以寸」だという関係が見えてくる。しかし、先に「傍線部の意味を案外誤解しやすい」と書いたのは、実はここからの処理を誤りやすいからなのである。不肖の悪を増長させるのだから、不肖はますます悪事に走る、ということは、不肖と賢者との距離はますます開く、だから傍線部の理解は②「その差は非常に大きい」となる、とやってしまっただけである。落ち着いて考えてほしい。筆者伊藤仁斎がこの文章で主張していることは、愛をもって教え導くことが大切だという点にある。つまり、力点は教え導く側すなわち「賢者」の側に置かれているのである。とすれば、「悪之過甚、反激成其悪者」と「不能以寸」の関係は、「悪之過甚、反激成其悪者」↓不肖がますます悪くなる↓「不能以寸」ではなく、「悪之過甚、反激成其悪者」↓賢者としては失格↓「不能以寸」と見なければならぬ。つまり、「不能以寸」の理解は①「その差はほとんどない」とするのが正しいということである。右の点さえ誤らなければ、後は簡単。「如く」の条件句をスタートとして、「賢者が愚者を見捨てる↓賢者はその価値・資格を失う↓賢者と愚者の差はないも同然」という論理過程を丁寧の説明すればおしまいである。

(三) これも特に難解な箇所はない。少し解説が必要なのは、「者」くらいであろうか。漢文の勉強を十分にしていない受験生だと、「者」

は「モノ」と読んで「人」の意味になる用法くらいしか思い浮かばないかもしれないが、このように上の語句を強調して提示する用法も「者」にはある。ここはその提示の用法である。それゆえ、この場合は「　には」「　に当たっては」などと訳しておくとうい。

また、「以X為Y」も通常は「XをYと思う・XをYとみなす・XをYとする」などと訳することが多いが、ここでは平易な日本語にするために意を汲んで「XがYである」としておけばよいだろう。

このような設問では細かなミスも致命傷になりかねない。「能」を正しく訳しているか、また「養」は単に「養う」ではなく「教え導く」というニュアンスのである訳語を選んでいるか、など細かな所にまで目を配って《解答》と見比べておこう。